

# 新年を迎えて ― 新しい年を迎える〈心〉―

細 川 正 義

2016年12月9日は夏目漱石の没後100年の命日です。そして2017年は生誕150年を迎える年になります。大きな〈節目〉を記念して様々なイベントが組まれます。漱石だけでなく2016年は遠藤周作、司馬遼太郎の没後20年でもありました。私達はこの様な〈いのちの節目〉を話題にすることが多くあります。私たち個人におきましても成人式、還暦、古希と、〈節目〉を祝い、記憶にとどめようとします。家族や友人の誕生日を祝うこともここに加えておくべきでしょう。

それはとりもなおさず「人のいのちのかけがえのなさ」を私たち一人一人が無意識のうちに心に刻んでいるからだと思います。

太宰治が、第二次世界戦争が勃発したその朝に書き上げた『新郎』において、「一日一日を、たっぷりと生きて行くより他は無い」「ああ、このごろ私は毎日、<sup>はなむこ</sup>新郎の心で生きている」と書いています。世界を相手にした大戦争が始まる事の重大さを受け止めている太宰ゆえの心情が示されています。

近年、世界の各地で地震などの自然災害が起こり、争い事も多発しています。アメリカの次期大統領が決まり世界情勢への影響が取りざたされています。日本の国際的存在と責任も話題になってきています。2017年が変化・変動の多い年になることが予測されます。私たちがそうした時の動きに確かな目配りをする必要があることは言うまでもありませんが、同時に、私達は太宰のメッセージのように、いかなる時にあっても、私達の「一日一日」を大切に<sup>となりびと</sup>して、私のいのち、隣人のいのちのかけがえのなさをしっかりと心に刻んで過ごしていかなければいけないと思っています。

ドストエフスキーが「人類は愛するが、隣の親父は憎い」という言葉をどこかで書いていました。私達はともすれば大言壮語になったり、大きなイベントに心を奪われたりして、それがために、身の日常をおろそかにし、隣人を軽んじてしまうことがあります。

「新年を迎える」ということは私たち一人一人の大切な〈節目〉です。自分の置かれている立場・責任・役割を見直して、自分にとって、隣り人にとってのかけがえのないいのちに対して、厳肅な気持ちをもって新年のスタートを切りたいと思います。

(文学部教授)